

# 高等学校国語科におけるコーパスを活用した語彙学習の実践 ——類義語を題材にした授業実践の効果と課題——

増 田 一 暁

## 1. 問題の所在と研究の目的

本研究は、国語科における語彙学習の手法として、コーパスを活用した帰納的な発見型学習に着目し、その方法と効果、課題を明らかにすることを目的として実践を行うものである。

国語科の語彙指導が担う役割は大きい。平成30年度告示高等学校学習指導要領では、「学習の基盤となる資質・能力」の筆頭として「言語能力」が挙げられており、その中核を担う教科としての国語科の在り方が示されている<sup>①</sup>。その中でも特に「語彙」の力は重視されており、国語科の全科目に語彙についての指導事項が設けられ、語彙を豊かにする指導の改善・充実が図られるようになった。「語彙」の項目は「語句の量を増やすこと」と「語句についての理解を深めること」の2つから構成されている。特に「言葉の働きや役割に関する理解」は、言葉に対するメタ認知に関わる、言語能力の向上のための重要な要素であるとされており<sup>②</sup>、「語句についての理解を深めること」に効果を発揮する語彙学習の方法が検討される必要がある。

これまで国語科で行われてきた語彙学習は、辞書を活用した演繹的なものがほとんどである。このような演繹的な語彙学習では、辞書の記述に依拠することで語句の意味の正確性を担保することが可能になる。一方で岡本（2019）はそのような語彙学習の方法だけでは、演繹学習に必要なスキーマの形成過程で問題があると指摘し、帰納的な学習がその補完に効果を発揮するのではないかと述べている。「語彙についての理解を深めること」をより効果的に達成するためにも、帰納的な語彙学習について検討する必要がある。

そのような中、外国語（英語）科では、語彙学習の新たな手法として帰納的に語彙の理解を深める「データ駆動型学習（data-driven learning：以下DDL）」が注目されている。英語学習においてDDL研究を進める西垣は、DDLを次のように説明する。

DDLはdata-driven learning（データ駆動型学習）の略です。DDLでは、児童がたくさんの英文データに触れて、自分の力で言語のルールに気づき、英文法を学びます。DDLは、教師から教わるのではなく、児童が主体的、探求的に言語のルールを学ぶ帰納的な学習方法の1つです。

西垣・峰岸・中條（2012）等ではこのようなDDLを用いた実践によって、帰納的な語彙学習が英語学習者の語彙習得、定着に効果を発揮したと報告されている。同様の効果は小学校国語科

においても明らかとなっており、西垣・安部ほか（2021）では、DDL 実践が語彙の学習に有効であること報告されている。西垣の DDL の説明における「英文データ」を「日本語コーパスから得られたデータ」に、「英文法」を「(語彙の) 語法」に置き換えれば、国語科においてもほぼ同様の活動をおこなうことができる。また語彙の使い分けについては「言葉のルール (語法)」の一部としてとらえることができる。その言葉のルールを、コーパスから得られた例文の群れから発見し、最終的にはその語法を (より定着的に) 身につける、というプロセスを、おむね DDL のプロセスであると見ることができる。

先に述べた小学校での DDL 実践 (安部・西垣ほか 2021) のほかに、中等教育の語彙指導における実践 (鈴木 2015)、古典教育におけるコーパスの活用 (宮城・江口 2018) など、語彙学習に限らず、国語科においてコーパスを活用する研究は近年増えつつある。これら先行研究では国語科におけるコーパスの活用について、次の 3 つの効果を指摘している。

- 1-1 語彙指導において帰納的な発見型の学習を実現する。(安部・西垣ほか 2021, 岡本 2019)
- 1-2 ICT 活用による学習者主体の活動を実現する。(宮城・江口 2018, 河内 2019)
- 1-3 辞書との併用により発展的な語彙指導を実現する。(岡本 2019)

岡本 (2019) は、コーパスを用いた帰納的な語彙学習によって本来であれば扱うことのできない膨大な生きた言語に触れる機会を学習者に提供し、辞書に載る意味とのずれを縮めることが効果的であると述べる。大量の用例に触れることで言葉の認識の枠組みを構築できる点は、コーパスを活用した語彙学習の大きな利点であると言えよう。

一方、学校教育におけるコーパス活用の課題としては、以下の 5 つが挙げられる。

- 2-1 コーパスの操作が難しい場合がある。(西垣・峰岸・中條 2012, 宮城 2019)
- 2-2 コーパスの中に難しすぎる用例が含まれる可能性がある。(石川・長谷部・住吉 2020)
- 2-3 性的な表現や誤った文章など、教育上不適切な用例が含まれる可能性がある。(鈴木 2015)
- 2-4 大量の用例を観察する作業における視認性、利便性が十分ではない。(宮城 2019)
- 2-5 国語科教育において活用できるコーパスが開発されていない。(宮城 2019)

これらは、国語科、外国語 (英語) 科におけるコーパスの活用に際して生じる課題として指摘されているものである。コーパスの操作性、例文の適切さなど、教材として用いるためには適切でない箇所もあるため、現時点でコーパスを学校教育現場で活用するためには、これらへの処置をした教材化が必要である。またこれらの他に、従来指摘されていない課題として次の点も指摘できる。

- 2-6 コーパスを活用した単元が教室の実態と合致していない

コーパスの活用実践には多くの授業時数が割かれていたり、教師のコーパス操作習熟について検討されていなかったりする。教室でコーパスを活用するための労力を最小限に抑えた単元のパッケージ化も重要である。例えば鈴木（2015）は、指導対象（児童・生徒）の属性、指導のプロセス等についての明示性・再現性が弱い。具体的には、どのような学習者に、どのようなコーパスを、どのように活用させたのかが明示されていない。国語教育においてコーパスを活用する先行研究は少なく、さらにこれら先行研究を見て授業を行うためには情報が不足しており、再現性が十分だとは言えないのが現状である。

そこで本研究では次の研究課題を設定し、これを明らかにすることを目的とし、実践を行った。

- ・コーパスを活用した帰納的な発見型語彙学習には、どのような効果や課題が存在するのか。
- ・コーパスを活用した語彙学習には、具体的にどのような準備と手順、時間が必要なのか。

## 2. 実践<sup>③</sup>の概要

### 2.1 授業実践の概要

#### （1）実施時期と対象

- ・実施時期：2021年9月
- ・対象：国立大学附属高等学校2年生 選択科目「現代文」受講者23名
- ・実施方法：オンライン形式による遠隔授業

#### （2）授業を受ける学習者

学力にはややばらつきがあり、外国にルーツを持つ学習者が数名含まれている。生徒は個々にコンピュータを所有しており、多くの学習場面で日常的に使用している。コンピュータの基本的な操作は習得しており、コーパスの操作についても6月に行なった1時間の予備実践で習得した。予備実践では単語の検索や出現件数の検討、同表記の異語の出現についてクイズ形式で学んだ。

#### （3）実験の方法

本実践では語彙指導の中でも「語句についての理解を深めること」の授業として、無意識的に行なっていた類義語の運用に対して気づきを得るためにコーパスを活用し、対象とする語句の実際の用例を観察する活動を展開した。類義語を題材とするのは、学習者自身が語句どうしの関係を発見するような指導の工夫が必要であるということが指摘されていること（中村2017）、コーパスを活用した語彙指導実践の中でも類義語を題材にしたものがあり（鈴木2015、岡本2019）効果が期待できることによる。

本実践では、コーパスの活用が学習者の語彙理解にどのように影響するのかを明らかにするために、次のような手順をとった。

- ① 題材とする類義語の特徴、共起などを内省によって記述させる。
- ② コーパスを用いた例文を観察することで分かった両語句の特徴、共起などを記述させる。
- ③ 内省、コーパス活用による考察で学習者がどのような記述を行ったのかを分析し、着目した点、変容などを調査する。

①～③の手順を行うために、本実践では図2のようなワークシートを用いた。学習者は「①「改良」と「改善」の違いについて予想しよう」、「②コーパスで検索した結果を分析しよう」、「③「改良」と「改善」について気が付いたことをまとめよう」の順で作業を行う。①では自省によって気が付いた両語句の特徴を、②ではコーパスの調査からわかったことを書くように構成してあり、それぞれの活動で語句の理解がどのように深まったのかを調査する。また活動内容・学習者の負担に大きな問題がなかったかを確認するために、①、②に作業時間を記す欄を設けた。

【図2】ワークシート「類義語の分析」

月 日 ( )	<b>類義語の分析</b>	現代文																													
氏名 <input style="width: 150px;" type="text"/>																															
<p>①「改良」と「改善」の違いについて予想しよう。(作業時間: 分)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 35%; text-align: center;">「改良」</td> <td style="width: 35%; text-align: center;">「改善」</td> </tr> <tr> <td>出現件数</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">出現件数が多いのは ( A ・ B )</td> </tr> <tr> <td></td> <td colspan="2">理由:</td> </tr> <tr> <td>共によく使われる語</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>特徴・違い</td> <td colspan="2"></td> </tr> </table>		「改良」	「改善」	出現件数	出現件数が多いのは ( A ・ B )			理由:		共によく使われる語			特徴・違い			<p>②コーパスで検索した結果を分析しよう。(作業時間: 分)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 35%; text-align: center;">「改良」</td> <td style="width: 35%; text-align: center;">「改善」</td> </tr> <tr> <td>出現件数</td> <td style="text-align: center;">件</td> <td style="text-align: center;">件</td> </tr> <tr> <td></td> <td colspan="2">理由:</td> </tr> <tr> <td>共によく使われている語</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>特徴・違い</td> <td colspan="2"></td> </tr> </table>		「改良」	「改善」	出現件数	件	件		理由:		共によく使われている語			特徴・違い		
	「改良」	「改善」																													
出現件数	出現件数が多いのは ( A ・ B )																														
	理由:																														
共によく使われる語																															
特徴・違い																															
	「改良」	「改善」																													
出現件数	件	件																													
	理由:																														
共によく使われている語																															
特徴・違い																															
<p>「改良」と「改善」について、気が付いたことをまとめよう。</p>																															

#### (4) 指導案

本授業は1コマ90分のオンライン授業特別時間割で行われた。本実践はそのうち前半の45分を用いて実施した。

時間	展 開	指導上の注意
5	<p>◎導入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時の目標を確認する。</li> <li>・ 授業環境の確認を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ インターネットの接続状況を確認する。</li> <li>・ 配布プリントや補助資料が手元にあるか確認する。</li> </ul>

10	<p>◎展開1「内省による類義語分析」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを準備する。</li> <li>・内省による類義語の分析を行う。</li> </ul> <p>①自身の経験をもとに、それぞれの意味を考える。  ②それぞれに共起する語や文脈などを予想しワークシートに記入する。  ③作業にかかった時間を記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・画面共有を行い、作業箇所を示す。</li> <li>・補助資料として別に配布した国語辞典の記述を参照しても良いことを示す。</li> <li>・作業時間は10分間であることを伝える。なお、10分間全てを検討に使うのではなく、自身が十分だと思った時点で終了し、作業時間として示すよう指示する。</li> </ul>
20	<p>◎展開2「コーパスを活用した類義語分析」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「梵天」へログインする。</li> <li>・レジスターを「教科書」に設定する。</li> <li>・コーパスを用いて用例の観察をする。</li> </ul> <p>①コーパスを用いて検索を行い、検索件数を記入する。  ②共起する語や文脈などを観察しワークシートに記入する。  ③作業にかかった時間を記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「梵天」のURLをTeamsにアップロードする。</li> <li>・画面共有を行いながら作業工程を確認する。</li> <li>・作業時間は15分であることを伝える。また、パソコンを用いて検索する場合Zoomから退出してもよいことを伝える。</li> </ul>
10	<p>◎展開3「活動のまとめ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自身の内省とコーパスとの結果を踏まえ、新たにわかったことや気づいたことなどをワークシートに記入する。</li> </ul>	

## 2.2 指導上の工夫

コーパスを活用したDDLの課題2-1から2-6に対応するために、本実践では以下のような工夫を施した。各項目に括弧書きで示す番号は、コーパスを活用したDDLの課題と対応している。

### (1) 使用するコーパス、検索システムの選定 (2-1, 2-3, 2-5)

本実践では分析対象を現代語とし、BCCWJ<sup>6)</sup>およびそれに付随する検索システムを活用する。BCCWJの検索システムには、品詞情報等の付加情報を利用して検索を行う「中納言」と、テキストベースで検索を行う「少納言」が存在するが、本実践では中納言の検索システムが複雑な操作を要求する(宮城2019)ことに鑑み、少納言を活用することとした。少納言で行う文字列検索は、普段学習者が行うブラウザ検索と似た操作であり扱いやすい。また中納言とは異なりアカウント登録の必要がなく、インターネットに接続した機器さえあれば誰でも利用できる。本実践当時は少納言の公開が停止されていたため、その代用として公開された「梵天」<sup>6)</sup>を活用した。

### (2) レジスター設定による条件統制 (2-2, 2-3)

本実践の活動において不適切な用例の出現を防ぐために、検索対象とする範囲(レジスター)を「教科書」とすることで条件統制を行なった。教科書中の用例であれば非教育的なものが出現せず、難しすぎる用例の出現も抑えることができる。

### (3) 適切な題材設定 (2-2, 2-4)

本実践では分析活動の題材とする類義語を以下の基準で検討し、「改良」と「改善」を選定した。

- ① 語そのものが難解すぎず、学習者の理解語彙あるいは使用語彙に含まれているもの。
- ② 学習者の内省において類義語同士の使い分けが自明ではなく、かつ分析しやすいもの。
- ③ 出現形による学習活動のばらつきを防ぐため、活用のない語句であること。
- ④ 国語辞典にある説明では使い分けが明確にわからないもの。
- ⑤ コーパスの検索結果件数が多すぎず、両語を合わせて 100 件未満であるもの。
- ⑥ コーパスに表示される用例に一定の傾向が認められるもの。

これらの観点は、活動を効果あるものとして成立させることと、学習者にとって手応えのある活動にすることを両立するために重要なものである。特に、大量の用例観察をもとに帰納的に語句の理解を深めるためには、①、②のような要件を満たしていることが望ましい。また「梵天」においてレジスターを「教科書」とした際に出現する例文を見ると、「品種」は「改良」としか共起しない例であることや、「○○を（改良／改善）する」という文型は「改善」に多く出現することなど、両語句の用例に一定の傾向を確認することができる。検索結果の数は両語句を合わせても 95 例と多過ぎず、「改良」と「改善」は分析活動のしやすい語句である。

### 3. 実践の結果とその分析

ワークシートの記述、事後アンケートの結果から、コーパスを活用した DDL の効果としてあげた 1-1 から 1-3 と、課題 2-1 から 2-6 のうち検証が可能なものについて順番に検討する。

#### (1)「1-1 語彙指導において帰納的な発見型の学習を実現する」ことについて

帰納的な発見型の学習を行なったことによって、語句の理解がどのように深まったのか。【表3】は学習者が内省をもとに挙げた両語句の特徴に関する記述と、コーパスの用例分析をもとに挙げた両語句の特徴に関する記述をまとめ、学習者の通し番号をつけたものである。なお、空欄は学習者の記述がなかったものを示している。

【表3】両語句の特徴に関する学習者の記述

番号	コーパス活用前（内省時）の学習者の記述	コーパス活用後の学習者の記述
1	「改良」が今あるものをさらに良くする、形あるもの「改善」が良くないところを直す、形ないもの	「改良」→理科・芸術・社会で良く使われる「改善」→情報・技術家庭・社会で良く使われる
2	「改良」「改善」すべきものがあり、それに対応するもの「改善」問題が発生したときに現れる	改良は今あるものをより良くすることを指し（触れる）改善は状況や物事を良くすること（触れない）
3	改良の方がくっついてできる言葉が多い。	改良・・・元々あるものをさらに良くする 改善・・・短所を直す（？）
4	どちらもさらに良くすること？	（改良が）理科に多い（改善が）情報に多い

5	改良は意見をもらう。改善は悪いところを直すといったイメージ	改良は〇〇改良 改善〇〇が多かった。
6	「改良」は向上するために使われる単語。「改善」は直すという意味が含まれ、悪い方向からいい方向に変えるときに使われる単語。	「改良」は技術面に対して使うことが多い。ものを対象とする。「改善」は使う対象が幅広い。専門用語に使うことが少ない。
7	改良は物で改善は曖昧で具体的に表せないもの	改良の方が具体的な物などのイメージ 改善の方が曖昧なもの
8	改良・・・良いものをより良くする。 改善・・・悪いものを良くする。	使われ方やニュアンスに違いがある
9	改良は一部を良くするという感じ 改善は全体	
10	Aはものをよりよくし、Bは事柄を良くする	Aは1つのことをよく、Bは全体を良くする
11	(改良は)物事に手を加えてさらに良くすること (改善は)劣っていたものに手を加え良い状態にすること	
12	「改良」はさらに良くすること「改善」は欠点を直して良くすること	「改善」は状況などの抽象的なものを良い方向へ改めること。「改良」は物体など具体的な対象の性質を良くすること。
13	(改良) レールを延長する (改善) レールを切り替える	(改良) 元あったものをさらに良くする部分を良くする (改善) 劣った部分を改め、よくすること。
14	改良は具体的、改善は抽象的	「改良」は理科で使われがち「改善」は情報、社会などで使われがち
15	改良は「物」実体のあるものに使われていて、改善は実体のない行動などに使われている	改良→製品に対して使っている。改善→行動を改めることを意味する
16	改良はプラスの方向へ、改善はマイナスをプラスへ持っていくこと?	改善は今後のこと?
17	改良はピンポイントでmustや過去形で多い 改善は全体的(フワッ)としていて、have toやwillが多い	改良は主語が「もの」の名前が非常に多い 改善は環境(貧困、労働・・・)を表すものが多かった。
18	「改善」は状態などの抽象的なものをいい方向へ改めること。一方「改良」は物体などの具体的なものに対して物事全体をいい方向に向かって改める際に使用します。	「改善」は抽象的なもの、「改良」は具体的なものをいい方向へ改める。
19	改良：プラス より良く 改善：マイナス 悪いところを直すというイメージ	(改良) 受身的 (改善) 能動的
20	対象が異なる 改良：形・手段 改善：目的・達成	改良：具体的 改善：抽象的
21	悪いところを良くする・・・共通 現時点か、最終目標時点を良くするの・・・違い	今段階の問題か、今後か否か(未来も含め)
22	改良はaがaの手でbを良くしていく 改善はaがaによって自分自身の行動などを良くしていくイメージ	「改良」は科学や機械・人工物について言及しているときに使われていた。「改善」は環境・視覚的なもの・人についての時に使われていた。
23	改良はさらに良くなるようにすること 改善は直して良くなるようにすること	改良はさらに良くなるようにすること 改善は直して良くなるようにすること

これら学習者の記述を整理すると、学習者が指摘した内容は以下の6つに分類できる。【表4】はこれを活動種別に集計したものである。

- ① 行為の質に対する言及
  - ・「改良」はより良くすることを、「改善」は悪いところを良くすることを表す（学習者6, 12等）
  - ・どのように「改良」, 「改善」するのか（学習者5, 13等）
- ② 行為の対象に対する言及
  - ・「改良」は具体的なもの, 「改善」は抽象的なことを対象とする（学習者14, 15等）
  - ・「改良」は一部分, 「改善」は全体を対象とする（学習者9, 10）
  - ・どんなものを対象とするのか（学習者12, 22等）
- ③ 共に使われる語句に対する言及（学習者3, 17等）
- ④ 行為の及ぶ時間的範囲に対する言及（学習者16, 21）
- ⑤ 出現文型に対する言及（学習者17, 19）
- ⑥ 出典（教科書との関連）に対する言及（学習者1, 14等）

【表4】記述内容別に集計した活動ごとの学習者の人数<sup>7)</sup>

	A コーパス活用 前に言及	B コーパス活用 後に言及	C A, B 両方で 言及	A + C コーパス活用 前合計	B + C コーパス活用 後合計
①行為の質	11	1	2	13	3
②行為の対象	4	2	6	10	8
③共に使われる語句	1	3	0	1	3
④行為の及ぶ時間的範囲	0	1	1	1	2
⑤出現文型	1	1	0	1	1
⑥出典	0	3	0	0	3

本稿では【表4】でも特に数の多かった①と②について注目する。

①についてコーパス活用前に記述した学習者（A + C）は13人だったのに対し、コーパスを活用した後に記述した学習者（B + C）は3人と大きく減少した。特にコーパス活用前にのみ①へ言及し、コーパス活用後に①に関して記述しなかった学習者（A）は11名となっている。

この11名の学習者について具体的に見ていくと、コーパス活用後に②, ③, ④, ⑥への言及が2名ずつ, ⑤への言及が1名, 具体的な記述なしが2名となっていた。これは学習者が、自身の内省をもとに特徴として考えていた内容とは一致しない用例に触れたことにより、意味の違いについて言い切ることを躊躇したためだと推測される。その結果, ②～⑥という、用例から推測される違いへ着目するようになったと考えられる。

同じように【表4】の②を見ると、Aの学習者は4名であり、①に比べて大きく数を減らしている。対して②のCを見ると6名、BとCの合計は8名と、それぞれ最多となった。

Cの学習者6名について具体的に見ていくと、学習者15や22のように、抽象的だった表現が具体化したものや、学習者18や20のように具体的だった事柄を一般化することができたものがあった。これらの学習者は、内省をもとにした自身の語句理解にふさわしい用例の存在証明を行うことができ、さらに理解を深めることができたと言える。

これを踏まえると、内省後にコーパスを活用して用例を観察することが学習者の語句の理解に与える効果として、次の2つが考えられる。

- (ア) 行為の質（語句の意味）について、内省をもとにした理解では不十分だと気づかせる可能性がある。
- (イ) 行為の対象となるものの性質や共に使われることの多い語句など、共起に着目した語句の理解を促すことに役立つ可能性がある。

本実践はコーパスを活用した用例観察が学習者にどのような効果をもたらすのかを検討するために行われた。今後はこの2つの効果を念頭に、内省のみで活動を行った場合、辞書等を用い演繹的に学習を行った場合、コーパスのみを活用し帰納的に学習を行った場合などと、比較検討を行う必要がある。

## (2) 「1-2 ICT 活用による学習者主体の活動を実現する」ことについて

事後アンケートの結果を参照すると、「コーパスを使ってみて面白かったですか」という問いに対して、23名の学習者のうち、90%を超える学習者が、「面白かった」と回答した。続く質問でどのようなところが面白かったのかを確認すると、次のような回答があった。

### ① 情報検索の容易さに関するもの

- ・一つの言葉を入れるだけでいろいろな結果が表示される場所
- ・検索すると、いろんな結果が出てきて自分の知らなかった使い方があったりして面白い
- ・検索の候補を変えるだけで結果が大きく変わるから

### ② 用例の豊富さに関するもの

- ・言葉について深く知れて、それが実際に使われている物も見れる場所
- ・単語がどれくらい使われているのかが一瞬で分かる場所。そして、どのような言葉遣いでどのように使われているのかが分かる場所
- ・様々な具体的な文から見ている中で改良と改善の使い方の違いを知り、辞書で調べるよりもより違いが分かりやすかったからです
- ・1番最初に使ったときは、件数を調べるためだと思っていたが、用例などを見ることで言葉の意味やニュアンスがだいたい理解できるというところ

このように、用例を自ら観察し発見する事による気づきは、学習者に強い印象を与えたようである。また、コーパスに学習者の直感的な操作が反映されるということにより、学習者の意欲が喚起された様子もうかがえる。このような直感的な操作、大量の用例観察による学習意欲の喚起は、従来行われてきた辞書引き学習<sup>8)</sup>等では得にくい、コーパス活用独自の効果である。

### (3) 「1-3 辞書との併用により発展的な語彙指導を実現する」ことについて

これまで国語科では、辞書引き活動を中心とした語義の正確さを担保する語彙指導を行ってきた。これに、本実践で明らかとなったコーパスを活用した語句理解の効果を加えることによって、学習者の言葉に対する認識の枠組みを構築することが可能となる新たな語彙指導を実現することができると考えられる。本研究では、本実践の単元の続きとして、類義語辞典を作成する活動、辞書の記述の妥当性を検討する活動を行なった。詳細について本稿では触れないが、一連の活動により学習者は辞書記述の妥当性を検討することを試みることができた。従来の辞書引きによる演繹的な学習と、コーパスを活用した帰納的な学習とを取り合わせた語彙指導の可能性についての検討は、他の機会では報告する。

### (4) コーパスの操作性について (「2-1 コーパスの操作が難しい場合がある」「2-5 国語科教育において活用できるコーパスが開発されていない」)

学習者に動的なコーパス教材を利用させる際の大きな懸念となっていたコーパスの操作について、本実践では文字列検索のみのテキストコーパスを用いることで対処した。実際にこの工夫が学習者にとってどれだけ効果的だったのかを、事後アンケートによって調査した。

「コーパスの操作は難しかったですか」という問いに対して、約56%の学習者が「簡単だった」と、約44%の学習者が「簡単でもないし、難しくもなかった」と回答した。「難しかった」と回答した学習者はおらず、本実践のような形式であれば、学習者にとって負担とならずにコーパスを活用することができるとうわかった。また学習者の多くは携帯電話からコーパスを操作していたようである。パソコン以外でも活動が実現できる点は、教室での利用を考える際に大きな利点となるだろう。

## 4. おわりに

本稿では、国語科における語彙学習の手法としてコーパスを活用し、その課題を検討した。特に従来行われていたコーパスを活用した実践報告は、実際にそれを見て授業をおこなうための情報が不足している。本実践はその欠を補い、実践のための十分な情報を得、提供するという意味で価値があると考えられる。

本実践は「語句についての理解を深めること」の題材として類義語を用い、実際に学習者がコーパスを利用する形式で行われた。類義語の分析に際しては、無目的にコーパスを活用するのではなく、指定された言葉に対して自らの内省をもとにした検討を行い、その後コーパスを活用

するという方法をとった。その結果、コーパスを活用した学習が内省だけの学習や辞書の語積だけでは得られない気づきを得た。またコーパスを利用する際の課題への対応が実現できた点も、本実践の成果であると考え。今後は今回明らかになった効果をより明らかにするために、より厳密な効果測定を検討している。

一方で本実践の結果、学習者に反例の検証をさせることに関する課題が浮き彫りとなった。学習者は内省、コーパスの活用を通して語句に対する気づきを得られた。その中で、自身の気づきに合致する存在証明までは至ったものの、その気づきが妥当であるか、反例はないのか、反例をどのように処理するのか、といった点には至らなかった。また自身の内省の感覚とコーパスの用例とが合致しなかった学習者は、そのことについて検討しなかった。自身の理解が正しいとはいえないと理解することが可能になったという点で語句理解が深まったと評価できる一方で、コーパスの利用を含めた語彙指導の効果をより一層高めるためにも、仮説検証型の授業も検討する必要があることが明確となった。

今後は、本実践で得られた知見をもとに、国語科におけるコーパスを活用した語彙学習について、具体的な効果に基づきパッケージ化された授業の提案と実践を重ねていく。

#### 初出情報

本稿は増田一暁（2021）「高等学校「現代文」におけるコーパスの活用に関する実践研究—類義語を題材にした授業の効果と課題—」全国大学国語教育学会編（2021）『全国大学国語教育学会 国語科教育研究 第141回世田谷大会（オンライン）研究発表要旨集』pp.35-38、および当日発表資料に加筆・修正を行なったものである。

#### 参考文献

- ・安部朋世・西垣知佳子・田中佑・橋本修・永田里美（2021）「ことばのルールに対する気づきを促す授業の実践とその成果」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究 第140回 2021年春期大会（オンライン）研究発表要旨集』pp.139-142
- ・石川慎一郎・長谷部陽一郎・住吉誠（2020）『最新英語学・言語学シリーズ第11巻 コーパス研究の展望（Aspect of English Corpus Studies）』開拓社
- ・岡本岳之（2019）「国語教育における語彙拡充のための語句指導：コーパスを用いた帰納的学習の有効性の検証」『学校教育実践ジャーナル』2, pp.11-20, 日本学校教育実践学会
- ・長田友紀・小林祐美・矢澤真人（2020）「小学生における教材文の語句調べに関する調査—紙の辞書と電子辞書の違いによる検索行動の比較—」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究 第138回 2020年春期大会（オンライン）研究発表要旨集』pp.33-36
- ・河内昭浩編（2019）『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究』pp.155-162, 朝倉書店
- ・小林祐美（2020）「小学生の語句調べにおける検索行動の検討—紙の辞書と電子辞書の比較を

通して一」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究 第139回 2020年秋期大会（オンライン）研究発表要旨集』pp.219-222

- ・鈴木一史（2015）「第2章 語彙教育とコーパス 2.2 語彙に着眼した学習指導」田中牧郎編『講座日本語コーパス 4. コーパスと国語教育』pp.36-50, 朝倉書店
- ・中村和弘（2017）「178 同義語・類義語・反対語」高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編『国語科重要用語事典』p.192, 明治図書出版
- ・西垣知佳子・峰岸識子・中條清美（2012）「中学・高校の英語教育におけるデータ駆動型学習に基づく帰納的学習の実践的研究」『千葉大学教育学部研究紀要』60, pp.419-426, 千葉大学教育学部
- ・前川喜久雄編（2013）『講座日本語コーパス 1. コーパス入門』朝倉書店
- ・宮城信・江口遼至（2018）『『日本語歴史コーパス』の教育利用の実践報告：高校の古典の授業における活用例』『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3, pp.185-191, 国立国語研究所
- ・宮城信（2019）「『日本語歴史コーパス』中高生インターフェイスの開発に向けて」河内昭浩編『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究』pp.155-162, 朝倉書店

## 注

- （1）文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説総則編』p.53
- （2）文部科学省（2016）『言語能力向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ』p.4
- （3）本実践は「高等学校国語科においてコーパスを活用することの言語運用への効果に関する調査・分析」（研究代表 矢澤真人）の元で実施された。
- （4）「現代日本語書き言葉均衡コーパス 概要」(<https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/>) 参照。
- （5）「梵天」([https://bonten.ninjal.ac.jp/bccwj/string\\_search](https://bonten.ninjal.ac.jp/bccwj/string_search))2021年2月12日に公開が開始され、同年12月24日で公開終了。レジスターを「教科書」とすると、2005年から2007年までの小学校、中学校、高等学校の教科書を参照することができる。
- （7）一人の学習者が複数の回答をしている場合、その記述内容別に人数を集計している。
- （8）ここでは紙の辞書を想定している。電子辞書では長田・小林・矢澤（2020）、小林（2020）が小学生を対象とした調査において、情報検索が容易であると学習者が感じていることを明らかにしている。

（開智望中等教育学校）